



# 【SS】 両手におさまる世界



衣玖矢曇

男は、折り紙で風船を折っていた。

もう三十路が近いのだが、子供の頃、母に教えて貰った紙風船、なるほど体が覚えているのか、折れば折るほどどう折ればいいのか、思い出してくる。

つつい熱中してしまう。

こんなに熱中したことなんて、ここ数年無かった。

やがて、男は、見事な紙風船を折り終えた。

美しき立方体。

そうそう、この立方体が好きで今住んでいる、この特殊な1Kのアパートを選んだのだ。

男の住むアパートの部屋も綺麗な立方体をした、天井の高い1Kである。

こたつの上に紙風船を潰れないように、ゆっくり置く。

「なかなかいい出来だ・・・」まじまじと見つめる。

ガタガタ！ゴゴゴゴ・・・

地震だ。

「震度2といった所か・・・。」

慌てて、テレビをつけてみる。

まだ、地震速報は出ていない。

どれ、しばらくつけておくか、そして、聞き逃さないように音量を大きくした。

再び、紙風船に戻り、少しつついてみた。

ドン！ドン！

天井から何かを叩きつけるような音がする。

「また、402の奴か」男の表情が渋い顔になる。

この前も、テレビの音が五月蠅いと言ひ、怒鳴り込んできた。

しかし、この時間帯は、いないはずなのだが。

本当はいつもテレビはつけっぱなしにしておきたいのだが、上の住人が五月蠅いので、なるべく付けないようにしている。

どの時間帯なら上の住人が不在なのか、いろいろ試した結果、すっかり頭に入ってしまった。

そして、今の時間帯は、上の住人はいないはずなのだ。

「まあ、今日はたまたま、休みの日かなにかでいるのだろう・・・」男は、テンションが下がってしまう。



男は、爆風で玄関の方に、吹き飛ばされる。

なんと、ついさっきまでいた、部屋が崩れ落ち、男の目の前は、土埃とグチャグチャになった建材や家財道具であふれた。

「え・・・ ああああ

あいつ（上の部屋の住人）大丈夫なのか・・・」